

## 赤米こぼれ話(6)

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者	小川, 正巳 猪谷, 富雄
巻/号	82巻7号
掲載ページ	p. 764-769
発行年月	2007年7月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 赤米こぼれ話 (その6)

小川正巳\*・猪谷富雄\*

〔キーワード〕: 赤米, イギリス稲, 外国米, 凶作, 大唐米, 占城稲

わが国の赤米およびその周辺の歴史に関して、従来の総説などにほとんど取り上げられなかった事柄あるいは広く人目に付いていない逸話的な話題などを報告してきた(小川・猪谷 2006)。ここにその6報を報告する。

## 1. 赤米の俗語・方言について

俚言とは雅言がげんに対義する用語で、俗世間に使われる言葉や方言を意味する。江戸後期の国語辞書『俚言集覧』(太田 江戸後期)は俗語・方言・ことわざの類を集成したものである。これを増補・改編したものが明治中期に『増補 俚言集覧』(太田 1899~1900)として刊行され、一般に広く読まれたという。そこに収められている赤米関連の事項を選び出してみると次のようになる。

- あかごめ たうぼうし, たうぼし, とぼし, たいたうまい, ねやす, あかも, むしのこめ  
稲類十粒に九は色赤し故に称す ○赤舂
- あかごめ ふるくなりてあかみたるこめなり  
○陳麩米
- あかたいたう 薩摩の方言にしたいたうごめとも  
云ふ 味美ならさる稲なり ○舂
- たいたうごめ たうぼし(筑前) たうぼうし(加賀)  
本草の舂なり

なお、これらとほぼ同じ内容が明治初期の辞書『語彙』(木村ら 1871~1884)にも記されている。

このように、赤米には、玄米が赤い本来のあかごめと赤味を帯びた古米を意味するあかごめの2種類があると記されている。後者のあかごめは、陳麩米ちんりんべい(あるいは陳倉米ちんそうべい)といわれた長期間保存した古米に見ることができるとある。

前者の本来のあかごめについては、主に長粒のインディカ型である大唐米の赤米を意味するトウボウシやタイトウゴメに関連した用語が載せられ、本

草学の分野などでは漢名の舂(音でセン)と表記されるとある。

トウボウシ, タイトウゴメ系以外でねやすとむしのこめは聞き慣れない用語である。赤米の別名のねやすとは“直安”あるいは“直賤”のことである(曾・白尾 1804)。これは直(値)が安いという意味であろうか。しかし、この用語には大きな誤解が生じていたように思える。すなわち、『和玉篇』の慶長15年版本には“糲”という漢字の訓読みにネヤス, タイトウゴメなどがある。“粘りつく”を意味する古語“ねゆ”の他動詞形が“ねやす”であることから、“粘る”を意味する漢字の“糲”(諸橋 1985)の訓読みにネヤスがあることはいいとして、タイトウゴメなどの記載があるのは誤りであろう。“糲”と赤米の大唐米とは本来まったく結び付かないのである。

次に、むしのこめとはむしのこめむしのこめのことである(曾・白尾 1804)。薩摩地方などにおいて、大唐米の赤米を舂の段階で蒸して、その後に舂を乾燥する方法が取られていた。このようにして得られたものが蒸米であった。これは、現在でも南アジアにおいて行なわれているパーボイルドライス(Parboiled rice)と同じものである。そのような赤米を指して、薩摩ではむしのこめ、肥後においてはほうで米(嵐 1974)と言われていた。

続いて、第二次世界大戦前後にまとめられた『分類農村語彙』(柳田 1937, 1947~1948)に目を向けてみよう。そこでは、赤米の俚言・俚称としてあかだま, こぼれ, とこぼし, なかしまい, だいとまい, みなくちもちがあげられている。ここでは、赤米に対して越後や信濃国だけで使われていたこぼれという用語について解説する。大唐米の舂はきわめて脱粒しやすいためにこぼれと呼ばれたのであるが、食味が劣り、早生のこぼれは普通稲を植えた田んぼの周辺の畦畔沿いに植え付けされた。越後の魚沼郡には“こぼれと稗(ひえ)は作の外”という諺があったという。こぼれは普通稲よりも一カ月早く

\* 県立広島大学生命環境学部 (Masami Ogawa, Tomio Itani)

稔るので、農民自身が食する米として収穫された。こぼれの米は炊くと増えるという大きな利点があり、その飯はこぼれかてあるいはとーこぼしかてなどと言われた。

さて、近年まとめられた『日本植物方言集成』（八坂書房 2001）では赤米については次のように記載されている。

アカゴメ あかたいとー 薩摩  
あかだま 島根（石見）  
あかとぼし 鹿児島（肝属）  
みずくちいね 岡山（苫田）

薩摩のあかたいとーのみ江戸期の史料から、他は明治以降の資料からの採録と思われる。岡山県北部の苫田郡のみずくちいねとは山間部の田んぼの水口付近に耐冷性の短粒の赤米を植えていたために、このように呼ばれていたのであろう。本書は、たとえば、ヒガンバナについては550種余り、ツユクサでは250種余りの方言を収め、わが国の植物文化の研究に貴重な資料を提供している。しかし、赤米に関しては、文献資料上の方言の採集があまりにも少なすぎであり、本書がさらに充実されることを期待する。

最後に、沖縄の方言について追記すると、沖縄では赤米はアカグミである。沖縄の赤米の在来種では羽地黒穂（ハニジクルー）や赤烏米（アハガラシ）などが代表な品種であったという（沖縄大百科事典刊行事務局 1983）。

## 2. 室町時代の漢詩に詠まれた赤米

室町時代の著名な禅僧の万里集九の『梅花無尽蔵』に、次のような赤米を詠んだ漢詩が収められている（万里 室町時代）。延徳4年（1492年）作のものである。

占城之早稲 孟秋已熟 魯史所記之大有年也  
鳴鳩雖拙 力田科 雨々暘々 古所歌 紅纒種東  
刺船聽 穉肥連屋 笑聲多

屏風に貼り付けた絵に対する七言絶句の賛詩であり、一行目はそれに付けられた短い序文である。おそらく、この屏風絵とは収穫の秋の田んぼと農家と川に浮かぶ小舟が描かれていたのであろう。通釈すると次のようになる（市村 1993）。

占城の早稲は初秋にはもう稔っている。歴史書『春秋』に記された魯の国の宣公十六年という大豊作の

ごとくである。

小鳩の鳴き声はまだへたであるが、公役の耕作の仕事を励ましてくれる。雨の日も晴れの日も昔から歌っている歌なのだ。赤い纒種（ハア、バア）が稔っている田んぼの東の方では船頭が舟に棹さしながら小鳩の鳴き声を聞いている。この秋は稲がよく稔ってどの家からも笑い声が多く聞こえる。

ここにある占城稲について見てみよう。現在のベトナム中部にあったシャム人の王国の占城（Champa—チャンパ、チャンパン）原産で、11世紀に中国で普及したイネが占城稲あるいは籼で、その系統の一部がわが国に渡来し、大唐米といわれた。この長粒でインディカ型の大唐米のほとんどは早生の赤米であった。また、纒種とは唐の杜牧（803～852年）の詩にある麗亜あるいは宋の陸游（1125～1210年）の詩などにある纒種という赤米のことである（天野 1962）。したがって、上記の漢詩は中国の詩文に精通した作者が作成したもので、わが国の稲作の実態をそのまま詠んだものとは思えない。

一般には、わが国における占城稲に関する初見は江戸期の『農業全書』（宮崎 1697）といわれている。わが国における占城稲とは、中国の占城稲とは異なり、江戸時代に占城国あるいは東南アジア方面から渡来したインディカ型で、大きな草姿を有した陸稲と考えられている（小川・猪谷 論文投稿中）。

## 3. 尾張のイギリス稲とは

江戸中期の尾張藩の儒学者、松平君山が著した『本草正譌』（松平 1776）は尾張本草学の先駆けをなすものであった。本書には長粒のインディカ型のイネである大唐米すなわち籼について次のようにある。

籼 俗名大唐米ト云 陸地ニ種 ベシ 糯梗ノ二種  
糯ヲ俗ニ イギリス稲ト云 一種 甚 長大ナ  
ルヲ東京稲ト云 是モ高田ニ種 レバ長クノビ  
テ穂モ大ナリ 水田ニレバ却テ長カラズ 葉大  
ニ茂リテ穂小サシ 大和本草占城ト云 是ナリ

本書に続いて刊行された『本草正々譌』（山岡 1778）には次のようにある。

籼 イネ 粳 ウルコメ  
糯 モチゴメ  
紬 一名早稲 タイトウコメ 又タウ  
ボシ 又イギリスト云

(注：粳と秈は同一である)

同時期に成立した『薬品手引草』(加地井 1778)は薬物名の異名・和名を記したもので、“**秈** いきりすいね はたけいね”とある。

これらの本草書にあるイギリス稲またはイギリスについては、木曾川・揖斐川・長良川の下流地帯を舞台にした、江戸末期の農書『水災後農稼追録』(長尾重喬 1860)にも陸稲の一つの品種として言及されている。

これらの史料においてイギリス稲の定義は完全には一致しないが、これは江戸時代に南アジア方面からもたらされた占城稲チャンパと呼ばれたもので、主として陸稲として栽培されていたものと思われる(小川・猪谷 論文投稿中)。なお、この系統のイネは赤米ではなく、白色系であった。尾張地方でこれがイギリス稲と呼ばれた理由は明らかでないが、このイネを持ち込んだ外国船の国名に由来するのであろうか。

驚くことには、第二次世界大戦後に行われた作物の地方名の調査において愛知県などの陸稲の地方名としていぎりすが登場するのである。すなわち、昭和24年(1949年)に農林省統計調査部が全国の農産物の地方名を調査した結果、岐阜県および愛知県の一部において陸稲の別名・異名としていぎりすという名称が採録されている(農林省統計調査部 1951)。これは、上述の江戸中期の尾張藩における本草書や農書にあるイギリス稲の流れを汲むものであろう。このように、イギリスという名称の中に200年以上にわたる尾張地方における稲の栽培の歴史が刻まれているのである。

#### 4. 江戸時代の凶作時の外国米

平成5年(1993年)の稲の凶作時におけるタイ米などの緊急輸入は記憶に新しい。江戸時代の凶作の際にこのような外国からの米の輸入がまったくなかったわけではない。その輸入量はきわめて小さかったが次のような記録が残されている。

元禄～享保期の約40年間にわたって京都を主として江戸・大坂、さらには諸国の天変地異・政治・行事・風俗・巷談を記録したものが『月堂見聞集』(本島 江戸中期)である。本書は当時の世間の事情をよく知ることができる史料として知られている。本書の巻之二十七の享保18年(1733年)初頭

に次のような記事がある。

今度南京船数艘薩摩国へ着岸す 大唐米二万石  
太竹 綾 木綿などを積み来たる 米は西国表の  
稲は虫入候に付 竹は近來日本地竹枯候故持参仕候由  
すなわち、前年の享保17年の西日本では浮塵子うじんかの被害によって稲が大凶作であったため、そしてその頃日本の多くの竹が枯死したため、数艘の南京船が大唐米2万石や竹などを持って薩摩国へ来航したという記述である。

また、慶應2年(1866年)の10月に幕府は凶作による米価の暴騰のため、外国米の輸入・販売を許可したことが『前橋藩松平家記録』、『慶喜公御実紀』、『藤岡屋日記』(須藤由蔵 明治期)などの史料に残されている。この幕末の外国米に関して『開化問答』(小川 1874)には次のようにある。

さらに慶應年中の不作には外国米の御蔭を以て一人も餓死するものはございません

ここでの“外国米”には“ナンキンマイ”と注がっている。また、『江戸の夕菜』(鹿島 1922)には嘉永6年(1853年)から慶応4年(1868年)までの平均米価表が記され、慶応3年には“南京米始めて渡る”と付記されている。

しかし、この外国米は大坂の庶民には悪評で、売れ行きはよくなかったことが『近來年代記』に次のようにある。

外国米出る事

……但し米かたくしてよくふえるなり 形細長くして  
あじわるしと云て いつかう売れ不申候

約140年前の出来事について書かれたこの内容は、近年のタイ米の緊急輸入時の状況とまったく同じであることに驚かされる。なお、著者が不詳である本書は天保8年(1837年)から明治20年(1887年)までの半世紀にわたる大坂(大阪)を主にした天変地異・事件・物価・巷談を記録したものである。

ここで紹介した江戸中期の大唐米そして幕末の外国米(南京米)とは中国からの長粒のインディカ型の米という意味であって、かならずしも赤米とはかぎらない。しかし、明治以降に輸入された南京米と称されるものにはしばしば赤米が混入していたことがよく知られている。

江戸期には何度もの大きな凶作が知られているが、その際にはここに紹介した以外にも中国大陸や東南アジアから米が緊急的に、小規模に輸入された

ことがあったと思われる。しかし、明治期以降にわが国を何度も襲った凶作の際に日本人の生活を守った輸入米に比べれば、江戸期の外国米の量はきわめて少なく、全国各地の悲劇的な大飢饉の回避にはほとんど無力であった。

## 5. 勝海舟が語る天保の飢饉の赤米

天保4年(1833年)から天保10年(1839年)は、全国的に天候が不順で冷害や洪水が発生し、農作物は大変な不作であった。これが天保の飢饉と言われるもので、米価が高騰して餓死者が続出し、各地で一揆・打ち壊しが頻発した。江戸本所生まれの勝海舟が晩年に語ったものを聞き書きした『氷川清話』(勝 明治期)に、この大飢饉時の江戸の悲惨な様子を知らることができる。その中の“飢饉と貧乏”の項に次のように記されている。

当時幕府では、上野広小路へ救小屋を設けて、貧民を救助したが、餓孳路に横はるといふことはこの時実際にあったヨ。また幕府は浅草の米庫を開いて、粉を貧民に頒けたが、その時、最も古いのは、六十年前の粉で、その色が真赤だったヨ。

(注；餓孳とは飢え死にした人のことである。)

ここで真っ赤だったのは玄米の色であって、赤米を指していると思われる。粉殻が赤色を呈した在来稲が、赤米であるかどうかは別にして数多くあったが、粉殻の色は貯蔵後に短期間で退色する。それに対し粉殻に包まれた赤米の玄米の赤色は貯蔵中に濃くなることはあっても退色することはない。また、赤米でない普通米を長期間貯蔵した、黄色から赤味を帯びた古米を“赤米”ということがあり、『氷川清話』にある米もそれではないかという考えがある(池田 1984)。しかし、真っ赤な色を呈しているという表現からはそのような古米とは考え難いのである。したがってここでは真正正銘の赤米の古米を指しているのであろう。

## 6. 脱粒し易い大唐米の脱穀を描く図絵

ほとんどが赤米であった大唐米(大唐稲)は、きわめて脱粒しやすく、「こぼれ」などと呼ばれることがあった。しかし、江戸期の各地にあった「こぼれ」がすべて大唐米とは限らない。当時稲の刈り取り後の脱穀は重労働であったから、脱粒しやすいと

いうことは注目すべき特質であって、大唐米以外の普通稲の中にも「こぼれ」というものがあった。しかし、半面、この特質は収穫前の立毛中に脱粒し、収穫減となることがあるという欠点でもあった。したがって、脱粒しやすい品種群は地域や収穫期によって取り扱いに注意を要した。このような観点から、興味あることに、江戸期には「こぼれ」とともに「こぼれず」という品種もあり、ともに重要な品種であった(盛永・安田 1985~2003)。たとえば、台風常襲地においては台風の到来前に収穫できる「こぼれ」、そして台風後に収穫する晩生の「こぼれず」のように作付け品種の選定は重要であった。

さて、江戸期の脱粒しやすい大唐米に話がもどるが、大唐米を脱穀している様子を描く2枚の図絵が知られている。その一つは江戸中期の金沢近郊を舞台にした『農業図絵』(土屋 1717)にある。おそらく夕方であろうか、2棟の家に運び込まれた大唐米を女性が横に倒した臼に打ちつけて、粉を落とす様子が彩色で描かれている(図1)。図中には次のように記されている。

大唐其日に家江入て粉を打落 粉を干て米にする

(訳；大唐米はその日のうちに家に入れて、脱穀する。その後粉を干して、米に仕上げる。)

同じ著者による農書『耕稼春秋』(土屋 1707)にはこの大唐米について次のようにある。



図1 『農業図絵』にみる大唐米の脱穀法



図2 『成形図説』にみる大唐米の脱穀法

大唐米は脱粒しやすいので、穂が出てから強い風に当たると大きく減収し、通常の半分か1/3になってしまう。……刈り取り後庭に薙(むしろ)を三方に張って、そこで大唐米を一把ずつ臼に打ちつけて脱穀する。得られた稲穂は天気が良ければ一枚の薙に4~5升を広げて2~3日干す。(現代語訳)

第二の絵は江戸後期の薩摩藩において作成された『成形図説』(曾・白尾 1804)である。薩摩や肥後などにおいては大唐米の稲穂はまず蒸し、その後干して、米を得るといふ蒸米いわゆるパーポイルド・ライスの製法があった。図2は“倣蒸米図”の一部で、刈り取られた稲束が田んぼの一部で直ちに打ち台に叩きつけられ、脱穀される様子を描いている。打ち台は4本の脚を付けたもので、竹で簀(すのこ)状になった台面に稲束を叩きつけると、脱粒した籾が簀の面を通り、台の下の薙(むしろ)に落ちるようになっていたものと考えられる。この際に籾が前方に飛び散らないように、薙状のもので大きな囲いをしている。この脱穀法は脱粒しやすい大唐米に適したものであった。このようにして得られた籾は、すぐに蒸籠(せいろう)で蒸されたのである。

## 7. 紅毛人が持ち込んだ稲とは

江戸中期の本草学者の阿部照任は享保11年(1726年)に町奉行の諏訪美濃守に『御注進書』を提出した(磯野 1999, 2002)。そこでは当時新たに渡来したと思われる作物すなわち古貝(パンヤ)、人参、

甘藷とともに稲の栽培を進言している。稲については“大き<sup>(なる)</sup>成稲”とあるので、当時わが国で栽培されていた稲に比べて草丈が高いものであったろうと推定される。この稲にはウルチとモチがあり、水稲および陸稲としても栽培され、九州各地で栽培され始めているとある。さらに、この種の稲は収量が高いと中国の書物にあると記されている。これらのことから、この稲はインディカ型の大唐米系のものであったと思われる。さらに興味あることには、この種の稲を30年余り前の元禄6年(1693年)9月に紅毛人(オランダ人)がわが国へ持ち込んだことを照任は目にしていたともある。

照任の進言通りこの稲の試作が行なわれたのかどうかの記録は残っていない。中世にわが国へもたらされ、まず西日本で栽培された大唐米ではあったが、進言当時すでにこの種の稲が関東地方でも栽培されていたと考えられる。そこで、照任が進言した稲とは、中世にわが国に導入された大唐米と同じインディカ型であるが、形質が少し異なる占城<sup>せんじょう</sup>稲であったのではなかろうか。わが国における占城稲とは中国での宋代からの占城稲とは異なり、江戸時代に東南アジアから南蛮船などによって伝えられたもので、主に陸稲として栽培された、草型の大きなものであった(小川・猪谷 論文投稿中)。

## 8. 中世の讃岐における大唐米に関する新史料

大唐米に関する文献上の初見は14世紀初頭の丹波国の荘園におけるものである(教王護国寺文書 218号 1308)。それに続いて、応永4年(1397年)の『讃岐国東長尾庄算用状』などが知られている。

この度、永和2年(1376年)の讃岐国の『秋山文書』の「沙弥日高 讓状」に大唐米のことが記されていることが発見された(高瀬町 2005)。そこには次のようにある。

(前略)

一 たうしほふつかつくり候た にんかうかちきやう  
せしかとも ちふんやふれてもたす

(後略)

“唐師穂仏禾作候田 日高が知行せしかとも地文破れて 持たず”と読み、唐師穂とは大唐米のことである。すなわち、<sup>ぶつげ</sup>“仏餉用”に栽培していた大唐米の田を沙弥日高(秋山秦忠)が知行していたが、

地文が破れ（土地の状況が変化し、耕作ができなくなり）”という意味である。

ここで興味あることは、仏飯用のために、おそらく赤米であったろう大唐米が作付けされていた田んぼがあったことである。岡山県総社市、長崎県対馬そして鹿児島県種子島の神社において赤米が神聖視され、それらの神田においては赤米が連綿と栽培されてきたことはよく知られている。これらと赤米の神聖視という点に関して、上述の讃岐における赤米の特殊な作付け田とは何らかの関連があるのであろうか？

### 引用文献

- 天野元之助 1962. 中国農業史研究. 農業総業研究所.  
 嵐 嘉一 1974. 日本赤米考. 雄山閣出版. 40および177.  
 万里集九 室町時代. 梅花無尽蔵(1972. 五山文学新集 第6巻. 東京大学出版会.).  
 市村武雄 1993. 梅花無尽蔵注釈. 第2巻. 統群書類従完成会.  
 池田正一郎 1984. 江戸時代用語考証事典. 新人物往来社.  
 磯野直秀 1999. 阿部照任の上申書と関連資料. 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 25:73-103.  
 磯野直秀 2002. 日本博物誌年表. 平凡社.  
 鹿島萬兵衛 1922. 江戸の夕栄. 紅葉堂書房(復刻本; 2005. 中央公論新社. 148-153.).  
 加地井高茂 安永7年(1778). 薬品手引草(京都大学附属図書館所蔵).  
 勝 海舟 明治期～. 氷川清話(氷川清話. 江藤淳・松浦玲 編 2000. 講談社.).  
 木村正辞ら 1871-1884. 語彙. 編輯寮・文部省編輯局(巻13 えまで刊行それ以後は未刊).  
 近來年代記〔大阪市史編纂所 編 1980. 近來年代記 下(大阪市史料第二輯). 大阪市史料調査会.〕.  
 教王護国寺文書, 218号 徳治3年(1308)〔黒田日出男 1983. 中世農業技術の様相(講座・日本技術の社会史 第1巻 農業・農産加工. 日本評論社)〕.  
 小川正巳・猪谷富雄 2006. 赤米こぼれ話(その5). 農及園 81(10):1089-1095.  
 小川正巳・猪谷富雄 江戸時代におけるインディカ型のイネ. 論文投稿中.  
 小川為治 1874. 開化問答 初編 巻下(リプリント日本近代文学 32 開化問答 2005. 平凡社.).  
 太田全斎 江戸後期〔寛政9年(1797)以降の成立〕. 俚言集覽.  
 太田全斎 著, 井上頼園・近藤瓶城 増補改編 1899-1900. 増補 俚言集覽. 皇典講究所印刷部.  
 沖繩大百科事典刊行事務局 編 1983. 沖繩大百科事典 上巻. 沖繩タイムス社.  
 前橋藩松平家記録(前橋市立図書館 編 2005. 前橋藩松平家記録 第36巻. 慶應2年10月. 煥乎堂.).  
 松平君山 安永5年(1776). 本草正譌(名古屋叢書 第13巻 科学編 1963. 名古屋市教育委員会 編集・発行.).  
 宮崎安貞 元禄10年(1697). 農業全書(日本農書全集 第12巻 1988. 農文協.).  
 本島知辰 編 江戸中期. 月堂見聞集(続日本隨筆大成 別巻4 近世風俗見聞集 4 1982. 吉川弘文館.).  
 盛永俊太郎・安田健 編 1985-2003. 享保 元文 諸国産物帳集成 第1-22巻. 科学書院.  
 諸橋徹次 1985. 大漢和辞典 巻8. 大修館書店. 914.  
 長尾重喬 万延元年(1860). 水災後農稼追録(日本農書全集 第23巻 1981. 農文協.).  
 農林省統計調査部 編 1951. 農作物の地方名. 農林統計協会.  
 曾榮・白尾国柱 編 文化元年(1804). 成形図説 卷之16(復刻版; 成形図説 第2冊. 1974. 図書刊行会).  
 須藤由蔵(藤岡屋由蔵) 明治期. 藤岡屋日記(鈴木棠三・小池章太郎 編 1994. 近世庶民生活史料藤岡屋日記 第14巻. 慶応2年6月-慶応3年3月. 三一書房.).  
 高瀬町 2005. 高瀬町史 通史編 第2節. 152-154.  
 土屋又三郎 宝永4年(1707). 耕稼春秋(日本農書全集 第4巻 1980. 農文協.).  
 土屋又三郎 享保2年(1717). 農業図絵(日本農書全集 第26巻 1995. 農文協.).  
 和玉篇(倭玉篇)慶長15年版本(中田祝夫・北恭昭 1966. 倭玉篇 研究並びに索引. 風間書房.).  
 山岡恭安 安永7年(1778). 本草正々譌(名古屋叢書 第13巻 科学編 1963. 名古屋市教育委員会 編集・発行.).  
 柳田國男 1937. 分類農村語彙. 信濃教育会.  
 柳田國男 1947-1948. 分類農村語彙(増補版). 東洋堂(復刻版; 分類農村語彙. 1975. 国書刊行会.).  
 八坂書房 編 2001. 日本植物方言集成. 八坂書房.  
 慶喜公御実紀(東京都 1959. 東京市史稿 市街篇 第48.).